

「教職概論」における教職課程入門の試み

—学校・教職の現状を語ることを通して—

中 西 仁
(立命館大学)

**An Attempt to Provide an Introduction to the Teaching Profession:
Learning from the Current Status of Schools and the Teaching
Profession**

Hitoshi Nakanishi

Summary

“Introduction to Teaching Profession,” a subject provided by the pedagogical course of Doshisha University, covers “the significance, etc. of teaching as a profession.” “Introduction to the Teaching Profession,” as an introductory subject in the pedagogical course, is designed to provide students with various opportunities to understand the significance of the teaching profession, the roles teachers should play, and teachers’ job duties (including job training, work rules, and guarantee of status), as well as opportunities that contribute to career options.

I consider that to better understand teachers in occupational terms, students enrolled in the introductory pedagogical course need to look at the current status of teachers, students and schools from the standpoint of teachers. Based on this concept, I designed a class curriculum with focus on a more clinical approach, by incorporating topics that reflect the present situations of teachers, students and schools in each class.

This paper examines how my attempt made in terms of an introduction to the teaching profession was received by students aspiring to become teachers.

1. はじめに

総合大学における中等教職課程は開放制を原則とするとは言え、「教職実践演習」などの導入に見られるように、このところ教職教育、もっと言えば教員養成について各大学の責任が問われるような状況が顕著となっている。とはいえ、安易な動機で教職課程を履修し始める学生が非常に多いことも周知の通りである。

今年度の「教職概論」の第一回目の授業（2014/4/11）では、オリエンテーションとして「現在の大学において教員免許をとることの困難さ」「教員として採用されることの困難さ」「教員という仕事の困難さ」「教員免許制度導入による教員免許失効の可能性」について概説的に説明した後、受講生に「教職についてどう思うか」というコメントを書かせたところ、免許取得及び教職についての自らの構えについて多くの受講生が触れていた。当日の受講生133名中、「頑張る」などの表現で積極的な姿勢を示した者は52名、「これから考えたい」など迷いの姿勢を示した者は42名、あまり主体性が感じられない消極的な姿勢を示した者は10名であった。

積極的な姿勢を示した者が多いように見えるが、入学直後の一回生の決意表明が多いと予想されることや、教職及び教職課程の「困難さ」を取り上げた講義を受けて積極的な姿勢を示すことは、彼らがこれまでの学校体験における部活動や受験勉強で培ってきた「根性主義」を示しているように感じる。一方、あまり主体性が無く消極的な姿勢を示した学生達は「親に勧められて」「何となく」という表現が多く見られた。

積極層と消極層の多くの受講生には教職及び教職課程に対してじっくり考える姿勢が見られないという姿勢が共通していると筆者は捉える。教職課程導入期の学生が、自らの専門に加えて多大な時間と労力を要する教職課程を履修し続けるかどうかについて判断するためには、一定程度の時間と学習が必要である。教職の学びを始めたこの時点では、以下のような迷いの姿勢を示すことが妥当であろう。

高校の時はずっと教員になるのが夢だったのですが、今日の講義を聞いて、正直揺らいできています。夢を追いかけていきたい気持ちと厳しい現状の狭間で

迷っています。この一年間でいろいろな講義に出席して、じっくり考えたいです。(商学部1回生)

一回生なので、まだ選択の幅は広いと思います。「教職の基礎」とも言えるこの授業を受け、教員免許取得の是非をじっくり考えたいと思います。(文学部1回生)

このような立ち位置に、一旦、全ての受講生を立たせることが教職課程導入期には必要ではないか。そしてそれは後者のコメントにあるように「教職概論」という科目の持つ大きな役割ではないか。筆者はそのように考える⁽¹⁾。

2. 「教職概論」をどのようにすすめたか

「教職概論」は同志社大学教職課程「教職に関する科目」のうち、「教職の意義等に関する科目」に相当する科目であり、1998年の教育職員免許法の改正により創設された。「教職の意義等に関する科目」は、教職の意義及び教員の役割、教員の職務内容（研修、サービス及び身分保障等を含む）、進路選択に資する各種の機会の提供等、について取り上げる科目であり、教職課程の入門科目であるといえよう。

文部科学省の「教職に関する科目の趣旨」⁽²⁾によれば、以下のような点を「特に留意すべき」としている。

- 教職の意義や教員の役割、職務内容等に関する知識の修得を通じ、教員を志望する者が教職についての理解を深め、将来教職に就くことについて多角的に考察する過程を援助し、動機付けを図るもの。
- 職場の実体験・類似体験や他の職業との比較などの機会を教員を志望する者に与えることにより、自らの教職への意欲、適正などを熟考させるとともに、最終的な進路選択について指導・助言するもの。
- 「現在の教員には何が求められているか」、「学生自身が教員としての適格性を持つためにどのような努力をしていけばよいのか」といった事項を、シラバスで示すこと。

これを筆者は段階的に、以下の4段階に捉えている。

i 教職への理解

ii 教職とは何かについての考察

iii 自らの教職への適性・意欲などについての熟考

iv 進路選択への指導・助言

しかし現実には、教職導入期の学生に半期15回の「教職概論」の授業でそのような学びを保障することは甚だ困難である。そこで筆者は受講生の教職への（知識的）理解（上記 i の段階）を授業内容の基本とし、授業の末尾に授業内容について各自が省察し自らの考えをコメントにまとめる学びを毎回取り入れることにより、教職とは何かについて主体的に考察（ii の段階）させてきた。授業で i ii の段階をきちんと踏むことによって、授業内外での「iii 自らの教職への適性・意欲などについての熟考」のきっかけを与えることになるだろうし、その結果、様々な機会に自ら望んで「iv 進路選択への指導・助言」を受けようとするだろうとの見通しに立ってである。

「教職概論」の鍵となる「教職への理解」について教職課程導入期の学生にどのようなアプローチが必要かについては、授業担当者によってさまざまなバリエーションが考えられるだろう。大学卒業後すぐに公立中学校現場で教員として働いた経験を持つ筆者は、教職課程導入期の学生にとっての「教職への理解」とは、主として教師・学校・生徒の現状を、学生が慣れ親しんだ「生徒」や「マスコミ」の視点ではなく、現場教師の視点から捉え直すことによってなされるものであると考えている。そこで毎回の授業に於いて、できるだけ教師・学校・生徒の現状に即した以下の11のトピックスを取り入れてきた。

① 3つの教職論（聖職論、労働者論、専門職論）

3つの教職論について概説した上で、現在、教職は専門職として捉えられつつあること、専門職とは何かについて触れ、教師は本当に専門職と言えるのかという問題提起を行った。

② 教職をめぐるストレス・多忙化

日本の教師をめぐる長時間労働やストレスによる心の病、バーンアウトの増加などに触れ、なぜそのようなことが起こるのか、行政や教師自身がどのようにアクションを起こすべきなのか考察させた。

③子どもの格差・貧困

経済的・文化的・社会的に苦しい立場に置かれている児童・生徒の数が増大していることと、そのような児童・生徒の現状について触れ、教師にできることは何かについて考察させた。

④学力問題

PISA ショックやゆとり教育批判、世論を巻き込んだ「学力至上主義」、全国学力テストの実施などについて触れ、それらの動きが学校現場・教師にどのような影響を与えているか考察させた。

⑤人事（特に採用）

教員採用試験の実際、校種・教科・地域別の採用の状況、非正規雇用の教員の増加等の教員人事の現状・課題について理解させた上で、教師という進路選択はどのような内実を持つのか考察させた。

⑥服務義務・分限・懲戒

教員の服務義務、分限処分の意味と処分内容、懲戒処分の意味と処分内容について説明した上で実際の処分事案について触れ、他の公務員よりも教員の処分基準が厳しいことについての是非を考察させた。

⑦研修・教員評価

教員研修の種類、教員研修の実際、教員免許更新講習について説明した上で、専門職化の中で教員評価が推進されているという現状と、教員評価の実際について触れ、のぞましい教員評価とは何かについて考察させた。

⑧授業づくり

学力問題や専門職化の中で教師に授業実践力が求められていることを説明した上で、学校現場で行われているすぐれた授業の実際に触れさせ、教師の授業づくりへの構えや実践について考察させた。

⑨学級経営

学級というものの制度的形成過程、現在の学校教育における学級の持つ意味、学級担任の仕事の実際について触れた上で、学級担任による学級経営の実際に触れさせ、学級担任とはどのようにあるべきかについて考察させた。

⑩特別支援教育

特別支援教育という概念、特別支援教育の対象となる児童・生徒の障害特

性について説明し、学校現場（普通学級）における特別支援教育の実践に触れさせ、特別支援教育における教師の役割について考察させた。

⑪進路指導・キャリア教育

従来型進路指導とキャリア教育との違い、中学校や高等学校（特に普通科）における進路指導の課題について説明し、学校現場における進路指導の実践に触れさせ、教師にとって進路指導を行うことの困難さを考察させた。

11のトピックスは3つのグループに分類される。すなわち、①～④については教員を取り巻く社会的状況、⑤～⑦については教職の制度的側面とその課題、⑧～⑪については現代日本の教員に要請される職能についてである。当然、これ以外にもさまざまなトピックスが考えられるが、マスコミや専門誌の報道、文部科学省や各教育委員会などの動向などから筆者が「教師・学校・生徒の現状」を代表するトピックスであると判断したものの中で、筆者のこれまでの研究・実践から教職課程導入期の受講生が学ぶべき基本的内容であり、かつ受講生に省察を迫れるインパクトがあると考えたものを選択した。トピックスを取り上げる際にはできる限り新しい映像や新聞記事、筆者が取材した現場教師の声を教材とした。

3. 教職志望層学生の実態

「教職概論」における「教師・学校・生徒の現状」を紹介し、「教職への理解」「教職とは何かについての考察」を進めるという試みは、受講生達にどのように受け止められたのであろうか。ここでは全ての受講生を対象とせず、教職を志望していることが明確であり、今後、教職課程の中核となっていくと予想される学生（以下、教職志望層学生）に焦点を当てて実態を見ていく。

教職志望層学生の絞り込みは、以下のような方法をとった。

- ・15回目の授業は高校現場から教員2名⁽³⁾を呼び講演とフリートーキングとした。
- ・15回目の授業については特に出欠を取らないが、教職希望者や学校教育に高い興味関心を持つ者は是非出席してほしいと呼びかけた。

・ゲストスピーカーのスピーチが終わったら中締めとし、もっと話を聞きたいという希望者が残って質疑応答のフリートークに参加させた。

最後まで残った受講生29名にアンケートをとった。アンケートの内容は、「あなたはなぜ教職概論の授業を取ろうと思ったのですか」「教職概論の授業の内容で、印象に残っているものを2つ程度選び、簡単に理由を述べて下さい」（この問いの下に①～⑩のトピックスのタイトルを列挙）「教職への志望について」（この問いの下に①とても②まあまあ③迷っている④少しだけ⑤全く、の選択肢を列挙した上で、理由を書かせた）アンケートの「教職への志望について」に対して「全くない」と答えた1名を除く28名の受講生を教職志望層と捉えた。アンケートの集計結果は次頁の表の通りである。

「印象に残った」が多かったのは、「②教職をめぐるストレス・多忙化」「③子どもの格差・貧困」であった。これらのトピックスは教職への進路希望を持つ学生達にとっては「向きあっていくのがこわいと思う」（No.13）「暗い現実」であり、できれば目を背けたいと考えているのではないかとの筆者の予想は外れた。これらを選択した理由として受講生達は、「自分があまりにも現実を知らなかった」というインパクトをまず第一に挙げている。加えて「教師というのは覚悟のいる仕事なのだと思った」（No.14）「教職の現場や教員の目線が現実味を帯びた」（No.2）「学校の外から見て初めて知った」（No.8）「将来の自分にとって無関係と言えない」（No.12）といった感想からわかるように、これらのトピックスは受講生に視点の転換を促し、できるだけ現場教師の立場に立って考えようとする当事者性の大切さに気づかせたのではないかと思う。

「⑧授業づくり」も比較的、多くの受講生が選択した。このトピックスは、②や③の「暗い現実」に対して専門職としての教師の創意工夫が活かせる分野である。「今までは生徒として授業を受ける側だったけど、授業をつくっていく側としてどんなことをすればいいのかを学べた」（No.3）「子どもが興味をもってしまうような授業や、その過程のための教材研究などもしてみたい」（No.4）「教室にいるすべての子どもたちのための授業をしなければいけないと身にしみたから。いかに学力格差を解消するかが大切だと思った。教科指導はやはり教員の中心だと思うので、大切だと感じる事ができた」（No.9）といったポジティブなコメントが見られた。

表1. 教員志望層学生が「印象に残った」と答えたトピックス

No	学部	回生	志望状況	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪
1	文	1	とても		○	○								
2	文	1	とても			○	○							
3	文	1	とても							○	○			
4	文	1	とても		○						○			
5	文	1	とても					○		○				
6	文	1	とても		○							○		
7	文	1	とても		○					○				
8	商	1	とても		○						○			
9	商	1	とても		○						○			
10	政策	1	とても		○						○			
11	社会	1	とても						○			○		
12	文	2	まあまあ		○				○					
13	文	1	まあまあ		○	○								
14	文	1	まあまあ		○				○					
15	文	1	まあまあ		○	○								
16	文	1	まあまあ		○	○								
17	神	2	迷っている			○								○
18	文	1	迷っている			○								
19	文	1	迷っている			○							○	
20	文	1	迷っている			○	○							
21	文	1	迷っている				○				○			
22	文	1	迷っている		○									○
23	文	1	迷っている		○						○			
24	法	1	迷っている			○	○							
25	商	2	迷っている		○	○								
26	商	1	迷っている		○			○						
27	商	1	迷っている				○						○	
28	GR	1	迷っている		○			○						
合計				0	17	11	5	3	3	3	7	2	2	2

- ① 3つの教職論（聖職論・労働者論・専門職論）
 ② 教職をめぐるストレス・多忙化 ③ 子どもの格差・貧困 ④ 学力問題
 ⑤ 人事（特に採用） ⑥ 服務義務・分限・懲戒 ⑦ 研修・教員評価
 ⑧ 授業づくり ⑨ 学級経営 ⑩ 特別支援教育 ⑪ 進路指導・キャリア教育

数少ないサンプルではあるが、教職課程導入期にある学生に、教職の「しんどい」部分の理解によって、当事者の視点に立つことの大切さに気づかせた上で、教職の「専門性」「やりがい」の部分を理解させることは、「自らの教職への適性・意欲などについての熟考」に導くことに対して有効であると言えるのではないだろうか。

4. 教職志望層の学びから

教員志望層は「教職概論」の授業の中でどのように学びを進めたのであろうか。各講義の際のコメントやアンケートの記述から、特徴的な学びを進めたと考えられる2名の受講生の姿から追跡したい。

一人目はNo.2である。この受講生は最後のアンケートでは、教職を「とても」志望しているとしているが、講義の始まりでは「教員免許があったら社会の中で生きていくのに便利かも知れない」という軽い気持ちであった。しかし、講義を受けていく中で教職を志望していくようになる。印象に残ったトピックスとして「③子どもの格差・貧困」「④学力問題」を挙げている。なぜそれらのトピックスをえらんだかについては、以下のように述べている。

印象に残っているというか、他の授業に比べてインパクトが強かった気がします。もしかしたら、見えないところでそういう境遇の生徒がいたのかな、と思うと自分の無知さに恥ずかしくなりました。この授業を通して、教職の現場や、教員の目線が現実味を帯びたと思います。

No.2は、これらの授業で「自らの教職への適性・意欲などについての熟考」を始めたと思われる。次の授業では、「⑤人事（特に採用）」について扱ったが、そのコメントに於いて「1回生である今のうちからできることを現実的に考えておかなければならないと思いました。（略）母校に今度挨拶しに行くので、絶対に教職についての話をお聞きしたいです」という記述が見られ、「進路選択への指導・助言」の段階にまで自ら到達したことがわかる。

アンケートの「教職への志望」に「とても」を選んだ理由として、「私の短い今までの人生の中で一番身近な職業で、一番知っていると思うからです。

企業で働いている自分は想像できないけれど、先生のビジョンは少しだけ描ける気がするんです。」と述べている。進路についてある程度主体的な態度を身につけているこの受講生が、正課や自主的な活動において今後どのような学びを進めるのか興味深い。

二人目はNo.19である。この受講生は最後のアンケートでは、教職志望を「迷っている」としているが、講義の始まりでは「私は正直、親に教職は取っておいた方が良いと言われて、取ろうと思いました。」という主体性のないものであった。しかし学びを進める上で、「③子どもの格差・貧困」の授業で、「格差」や「貧困」は今までの自分の学校生活において身近なものだから。また「格差」や「貧困」は教育に大きく関係することを（この）授業を受けて学んだから。」というアンケートのコメントに見られるように、主体的に教職について考えるようになったと考えられる。このことは、例えば教員採用の授業の際に取り上げた教員不足の問題に対して「積極的に学校ボランティアに参加しようと思いました。」というコメントや、教員研修の授業内容に対する「教職に関する実態を知らない、教員になった時に理想と現実のギャップにより苦しむと思う」「大学でしか培うことができないものがたくさんあるので、大学4年間でできることは積極的に取り組みたいです。」といったコメントをしていることからもうかがえる。

アンケートの「教職への志望」に「迷っている」を選んだ理由として、

はっきりと教師になりたいというわけではないが、教育について興味があるので、迷っている状態です。教師の現状は厳しいものがあるし、大変なものではあるが、やはり教師の存在は生徒にとって大きいものだと思う。教職の授業を受けたりして、じっくり考えたいと思う。

と述べていることから、「自らの教職への適性・意欲などについての熟考」への指向を深めたと考えられる。

まとめにかえて

筆者が他大学も含めて「教職の意義に関する科目」を担当して10年目とな

る。担当当初は、「教職概論」という一種とりとめもないタイトルのこの科目をどのように進めるかについて大いに悩んできた。最初にしたように半期15回の授業で筆者がそこにいた学校現場や教職というものを伝えることは不可能と考えたからであり、同時に筆者の経験はきわめて個人的なものであり、それを「概論」とすることにも抵抗があった。あれこれ試行錯誤しながら授業を進めているが、次第に「教職概論」は「教職」についての一般的知識を習得するための科目ではあるが、一方で「教職」という一つの特徴的な職業について科目担当者が自分なりの認識や見解を語り、それを持って受講生に熟考を迫る科目でもあると強く感じるようになった。

本稿ではここ数年間の筆者の授業の進め方・考え方に基づく今年度の授業実践について述べてきた。中学校教員という経歴や教科教育という研究領域に影響されて、ある種の偏りのある授業内容となっていることは、重々理解しているつもりである。この点については、大方の批正を請いたいと思う。

注

- (1) 導入期教育といったとき、高等教育一般あるいは専門教育の導入である場合が一般的であり、多くの大学の教職課程では、中等教職課程には「導入」という観点が明確ではないように思われる。これは中等教職課程が開放制を原則とするオプション履修であるので、「やる気のある学生」があえて履修しているという想定で、教職課程の科目を履修すれば予定調和的に学生の学びが深まるという前提に立っているからではないか。
- (2) 文部科学省『教職課程認定申請の手引き（平成26年度改訂版）』
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2014/02/28/1267643_1.pdf（最終閲覧日 2014/10/03）
- (3) ゲストスピーカーとして招聘したのは、G氏（男性、大阪府立高等学校教諭）Y氏（女性、兵庫県立高等学校教諭）。ともに同志社大学2009年卒業。スピーチの内容は「大学でどのように学んできたか」「なぜ教員を目指したのか」「どのようにして採用されたのか」「現在の仕事の状況」について語ってもらった。若年教師を呼んだのは、教職志望層の学生が参考にできる部分が多いだろうという期待や、発展途上である彼らは成功譚

や「できあがった」実践のストーリーより失敗や苦勞を語り、それが学生の共感を呼ぶだろうという期待からである。

文献

藤沢伸介（2004）：「反省的実践家」としての教師の学習指導力の形成過程。
風間書店

今津孝次郎（1996）：変動社会の教師教育。名古屋大学出版会

今津孝次郎（2012）：教師が育つ条件。岩波書店

黒沢英典（2006）：私立大学の教師教育の課題と展望。学文社

横須賀薫（2006）：教員養成これまでこれから。ジアース教育新社

横須賀薫（2010）：新版教師教育の探究。春風社